301
40

全訳 芥子園畫傳

第七

始

全譯

芥子園畫傳

第七冊

竹譜

667

301
40

全譯

莽子園畫傳

第七冊　竹譜

小杉放庵　註解
公田連太郎　譯文

東京アトリエ社刊行

昭和一〇・六・七

301-40

芥子園畫傳第七冊竹譜目錄

畫竹淺說 十三則

畫法源流……五
畫墨竹法……一六
位置法……二〇
畫竿法……二四
畫節法……二七
畫枝法……二九
畫葉法……三一
勾勒法……三三
畫墨竹總歌訣……三五
畫竿訣……四一
點節訣……四二
安枝訣……四一
畫葉訣……四三

畫竹起手發竿點節式 九則

初起手一筆……四八
起手二筆三筆……四八
直竿……四八
點節乙字上抱……四八
點節八字下抱……四八
細竿……四八
斷竿……四九
解籜……四九
直竿帶曲……四九

發竿式 五則
垂梢……五〇
橫竿……五一
露根……五一
根下竹胎……五〇
根下笋鞭……五一
生枝式 六則
起手鹿角枝……五二
魚骨枝……五二
鶴爪枝……五二
頂梢生枝……五二
左右生旁枝……五三
根下生枝……五三
發竿生枝式 四則
老竿生枝……五四
嫩竿生枝……五四
雙竿生枝……五五
細篠生枝……五五
布仰葉式 八則
一筆橫舟……五六
一筆偃月……五六
二筆魚尾……五六
三筆飛雁……五六
三筆金魚尾……五六
四筆交魚尾……五七
五筆交魚雁尾……五七
六筆雙雁……五七
布偃葉式 七則

一筆片羽……五八
二筆燕尾……五八
三筆个字……五八
四筆鷺鴉……五八
四筆落雁……五九
五筆飛燕……五九
七筆破雙个字……五九
布葉式 三則
五筆破分字……六〇
六筆破个字……六一
疊分字……六一
結頂式 三則
布葉生枝結頂……六二
老葉出梢結頂……六三
嫩葉出梢結頂……六三
垂梢式 一則
過墻大小二梢……六五
橫梢式 一則
新篁斜墜嫩枝……六六
出梢式 二則
新篁解籜右梢……六八
新篁解籜左梢……六九
安根式 三則
下截見根……七〇
根下苔草……七〇
根下泉石……七〇
古今諸名人圖畫

虛心友石　摹李息齋筆法……九六
雙竿比玉　曾見自然老人有此圖以意臨之……九八
瀟洒臨風　擬樂善老人筆意……八〇
新篁解籜　做程堂畫……八二
新梢出墻　做陳橫崖筆法……八四
濃葉垂煙　學東坡居士……八六
雲根玉立　做盛雲浦竹石蒼潤法……八八
白苛隱霧　做張廷璐……九〇
迎風取勢　做夏仲昭風竹……九二
輕筠滴露　摹文湖州筆意……九四
清節凌秋　學史端本雪行水湧之趣……九六
清影搖風　臨王孟端……九八
直節干霄　做黃華老人……一〇〇
柔枝帶雨　學歸文休畫法　醒園柯……一〇二
湘江遺怨　擬蕭協律畫法……一〇四
露凝寒葉　臨屈處誠畫……一〇六
飛白傳神　學介軒老人……一〇八
龍孫脫穎　臨文與可新篁圖……一一〇
雪壓銀梢　做解處中……一一三
鳳枝吟月　學僧梼軒筆……一一四
夭矯超霞　雪松老人臨宋仲溫朱竹……一一六
變幹拂雲　學王澹遊……一一八
修筠抱節　趙元靖學蘇長公放筆……一二〇
高竿垂綠　做吳元瑜……一二三

青在堂畫竹淺說

畫法源流

李息齋竹譜自謂寫墨竹初學王澹遊得黃華老人法黃華乃私淑文湖州因覓湖州眞蹟窺其奧妙更欲追求古人鈎勒著色法上自王右丞蕭協律李頗黃筌崔白吳元瑜諸人以爲與可以前惟習尙鈎勒著色也有云五代李氏描總上月影創寫墨竹考孫位張立墨竹已擅名於唐自不始於五代山谷云吳道子畫竹不加丹青已極形似意墨竹卽始於道子二者則唐人兼善之至文湖州出始專寫墨眞不異杲日當空爝火俱息師承其法歷代有人卽東坡同時猶北面事之其時師湖州者並師東坡一燈分焰照耀古今金之完顏樗軒元之息齋父子自然老人樂善老人明之王孟端與夏仲昭眞一花五葉燈燈相續故文湖州李息齋丁子卿各立譜以傳厥派可謂盛矣至若宋仲溫畫硃竹程堂畫紫竹解處中畫雪竹完顏亮畫方竹又出乎諸譜之別派若禪宗之

有散聖焉。

【譯】李息齋の竹譜に、自ら謂ふ、『墨竹を寫すこと、初め王濟遊を學び、黃華老人の法を得たり。黃華は乃ち文湖州に私淑せり。因つて湖州の眞蹟を求め、其奧妙を窺ふ。更に古人の鈎勒著色の法を追求せんと欲し、上は王右丞・蕭協律・李顏・黃筌・崔白・吳元瑜諸人よりし、以爲へらく與可より以前は、惟だ鈎勒著色を習尙せりと。「五代の李氏、牕上の月影を描き、創めて墨竹を寫せり」と云ふ有り。孫位・張立の墨竹已に名を唐に擅にせしを考ふるに、自ら五代に始まらず。山谷云ふ、「吳道子、竹を畫き、丹青を加へずして、已に形似を極む」と。意ふに墨竹は卽ち道子に始まる。二つの者は則ち唐人兼ねて之を善くせしなり。文湖州出づるに至りて、始めて寫墨を專らにす。眞に、呆日、空に當り、爛火俱に息むに異ならず。其法を師承すること、歷代、人有り。卽ち東坡は時を同じくして、猶ほ北面して之に事へたり』と。其時、湖州を師とする者は、並に東坡を師とせり。一燈、焰を分ち、古今を照耀せり。金の完顏樗軒・元の息齋父子・自然老人・樂善老人・明の王孟端と夏仲昭と、眞に一花五葉、燈燈相續ぐ。故に文湖州・李息齋・丁子卿、各〻譜を立てて以て厥派を傳ふ。盛んなりと謂ふ可し。宋仲溫が硃竹を畫き、程堂が紫竹を畫き、解處中が雪竹を畫き、完顏亮が方竹を畫きしが若きに至りては、又、諸譜の別派に出づ。禪宗に散聖有るが若し。

【註】李息齋竹譜、元の李衎、字は仲賓、息齋道人と號す。薊邱の人。集賢殿大學士・浙江行省平章政事に拜し、薊國公に追封し、文簡と謚せらる。古木竹石は王維・文同を庶幾し、著色は李顏を師とす。其著に竹譜十卷有り。原本は久しく佚す。今の本は永樂大典より錄出す。凡そ四門に分つ。畫竹譜、墨竹譜、竹態譜、竹品譜なり。畫の程式・竹の種類に於て、詳盡せざる無し。但だ藝に游ぶの資なるのみならず、亦、博物の助なり。こゝに抄出する所は、竹譜の序說なれども、省略甚だしきに過ぎたる憾有り。今、抄譯して以て參考に資す。其文に曰く、『予、昔、人の畫竹を觀、嘗て旁より其筆法を窺ふ。始めには喜ぶ可きが若くなれども、旋くにして類せざるを覺え、輒ち歎息して捨て去り、之を觀るを欲せず。是の如き者凡そ數十輩。後、濟游先生の畫く所を得たり。迥然として同じからず。遂に學ばんことを願ふ。已にして溯りて其源を求むるに、濟游は本、乃翁黃華老人に學ぶ。老人は文湖州を學ぶ。是の時、初めて湖州の名を聞く。二老の遺墨、皆、未だ之を見ず。後、喬中山秘書に從つて黃華の橫幅を觀る。一枝數葉、石に倚りて蒼蒼たり。濟游差や逮ばざるを疑ふ。甚だ取りて以て法と爲さんと欲す。而も之を自得する無し。或るひと云ふ、黃華は文を宗とすと雖も、每に燈下に竹枝を照らして影を摸し眞を寫す。宜なり常人の爲に異なる者。濟游は特だ父の書を括讀するのみ。必ずしも學ばざるなりと。予深く以て然りと爲す。又、東坡・山谷二公洎び宋金兩朝の名士が、文湖州の筆を贊美し、造物と比するを念ひ、尤も卽ち快く觀ざるを以て恨と爲す。至元乙酉、錢塘に來り、始めて十餘本を見る。皆、予を起すに足る者無し。妄に謂へらく、蘇黃の評は、其交親に私するに幾く、後賢未だ聲に隨つて附和するを免れず。要ず當に黃華・濟游を以て優劣を定むべきのみと。友人王子慶に會し、玆事を極談す。子慶曰く、君は特だ未だ眞蹟を見ず。前輩は輕〻しく推許せざるなりと。予曰く、近ごろ屢〻之を見き。題識を大書せり。事ゑ盡く僞ならんやと。子慶曰く、僞に非ずして何ぞと。予茫然として自失し、猶ほ子慶の立論の偏するを疑

ひ、漫に之を詰りて曰く、若は嘗て中州の黄華老人の作る所を見しかと。子慶曰く、黄華の作は、吾固に未だ見ず。湖州の作は、君、又、未だ之を見ざるなり。何ぞ能く是非を決せんや。府史某人なる者の藏本甚だ眞なり。明日借り來りて、以て自ら其品第を定めば、可ならんかと。宿を越えて子慶果して携へて予に過る。則ち一幅五挺、濃淡相依り、枝葉間錯し、折旋向背、各〻姿態を具し、曲に生意を蘊し、渭川・洪水の間に坐するが如し。方めて前輩の議論を以て媿づる無しと爲す。黄華誠に此に取る有り。而して照影の語未だ詳かならず。自ら悔ゆ、聞見寡陋にして、子慶の博識の若きは、及ぶ可からざるなりと。善價を以て之を致さんことを屬す。猶ほ斬む。油紙を用ひて臨摹し、持して維揚に歸る。明年四月、重ねて來る。或るひと此れを出して售らる。遂に酬ゆるに二十五券を以てし、欣然として平生を慰滿す。是れより連りに三本を得たり。悉く故習を棄てて、壹意、之を師とす。日累なり月積もりて、頗る悟解するに似たり。好事者、往往徵索し、流布すること漸く廣く、謬りて相肯可せらる。獨り鮮于伯幾父謂へらく、墨を以て竹を寫すは清なり。未だ其本色を傳ふるの淸且つ眞たるに若かざるなりと。予に强ひて墨竹の法を用ひて青綠を加へしむ。畫成りて、蠢ぼ觀る可しと雖も、終に合作に非ず。將に復た其說を討論せんとす。而して俗工は咸間ふに足らず。近古を追尋し、王右丞の開元の石刻を得たり。屢〻模勒を經て眞を失へり。又、蕭協律の筍竹の圖を得たり。絹素糜潰し、筆蹤慘淡たり。方に本に對して臨倣せんことを謀る。偶〻故人劉伯常、余に過りて曰く、吾、舊、李頗の叢竹の圖を藏すること已に久し。君が酷だ好むを知り、輟めて以て贈と爲す。二圖は俱に宣和の故物にして、頗尤も美を專らにす。後來、其右に出づる者無しと。是に於て、又、畫竹の法を得たり。蓋し唐の王右丞・蕭協律・僧夢休・南唐の李頗・宋の黄筌父子・崔白兄弟より、吳元瑜に及ぶまで、竹を以て家に名づくる者、總に數人のみ。右丞の妙蹟、世、其傳罕なり。協律は傳はると雖も、昏腐して辨ずる莫し。夢休は疎放にして、流れて反らず、自ら方外に屬す。黄氏は神なれども似す。吳は似れども神ならず。惟だ李頗のみ形神兼ね足り、法度該ね備はり、謂はゆる衆表に懸衡たり、將來に龜鑑たる者なり。墨竹も亦、唐に起れども、源流未だ審かならず。舊說く、五代の李氏、隱影を描き、衆始めて之に效へりと。黄太史は、吳道子に出づと疑ふ。宋朝に至るに迨びて、作者寖く盛なり。文湖州、最も後に出で、杲日、空に升り、燭火俱に息み、黄鐘一たび振ひ、瓦釜、聲を失ふに異ならず。豪雄俊偉なること蘇公の如きすら、猶ほ終身北面せり。世の人、苟くも心を藝圃の妙に游ばせんと欲せば、法則とする所を知らざる可けんや。畫竹は李を師とし、墨竹は文を師とす。鵠を刻して鶩に類す。吾、愧を知る。幸に熙朝に際し、文物興起し、鞶轂の下、薦紳の列に齒し、薄宦驅馳し、徧く賢士大夫に交はるを辱くし、講聞すること稍や詳かに、且つ餘力を竭して求購すること數年、墨竹に於て、始めて黄華老人を見、又十年にして始めて文湖州を見、又三年にして、畫竹に於て、始めて蕭李を見る。之を得ること此の如く其れ難きなり。彼の窮居僻學は、當に何如すべきか。退きて惟ふに嗜好迂疎にして、久しくして乃ち彌〻篤く、天、其志を成し、行役すること萬餘里、會稽に登り、吳楚を歷、閩嶠を踰え、東南の山川林藪、游涉して殆ど盡す。至る所、此君に非ざる者は、與に目を寓する無し。凡そ其族屬支庶、形色情狀、生聚榮枯、老稚優劣、窮諏熟察するに、曾て致を一にせず。往歲、國の威靈に仗り、遠く交趾に使し、深く竹鄉に入り、詭異の產を究觀す。ここに於て疑似を辨析し、品彙を區別し、敢て盡く紙上の語を信ぜず、心を焦がし思を苦しめ、參訂比擬し、

嗜として予と竹とを忘る。自ら謂へらく、略〻古人の用意の妙處を見ると。一藝の精を求むるは、信に易からず」と。○王濟遊、金の王曼慶、字は禧伯、濟遊と號す。庭筠の子なり。官、行省右司郎中に至る。墨竹樹石絶佳、山水を能くす。詩筆字畫、俱に父の風有り。○黄華老人、金の王庭筠、字は子端、黄華老人と號す。河東の人。大定丙申の進士、思州府軍事判官に調せられ、後、翰林修撰と爲る。山水古木竹石は、上、古人に逼り、米元章の下に在らず。其書法、子曼慶に傳へ、張天錫に至る。庭筠、生れて未だ期年ならざるに、書を視て十七字を識る。七歳にして詩を能くす。儀觀秀偉にして、善く談笑す。文を爲り、能く言はんと欲する所を道ふ。詩律深嚴、七言の長篇、尤も險韻に工なり。正隆丙子生れ、泰和壬戌卒す。年四十七。藂辨文集を著はす。○文湖州、宋の文同、字は與可なり。前に註せり。○私淑、直接に其人の教を受けず、遙に其人を慕ひ又は師として其道を學ぶこと。孟子離婁篇に、吾は私にこれを人に淑くす、とあるに本づく。○王右丞、唐の王維。○蕭協律、唐の蕭悅、官協律郎たり。竹、雅趣有り、名、當時に擅なり。當時、白居易、詩を題して云ふ、舉レ頭忽見不レ似レ畫、低レ耳靜聽疑レ有レ聲と。其の推さるること此の如し。居易、名、當世に擅なり。一たび品題を經たる者は價增すこと數倍なり。○李顔、南唐の李顔、南昌の人。畫竹を善くし、氣韻颯舉し、小巧を求めずして、多く情を放にし、率筆便ち生意有り。○黄筌、後蜀の黄筌、字は要叔、成都の人。少くして開悟、肯て羣兒と語らず。年十七、後主衍に事へて待詔と爲る。孟昶に至りて、檢討少府監を加へられ、累遷して京副使を加へらる。年十三、郡人刁光胤に事へて丹青を學び、禽鳥山水に工なり。松石は李昇に效ひ、花竹は滕昌祐を師とし、鶴は薛稷を師とし、人物龍水は孫位を師とし、諸家の善を資り、妙に臻らざる無し。後主衍書

て筌に詔して、內殿に於て吳道元の畫鍾馗を觀し、乃ち筌に謂つて曰く、吳道元の畫鍾馗は、右手の第二指を以て鬼の目を抉る。拇指を以てするの力有りと爲すに若かざるなりと。筌をして改め進めしむ。筌是に於て道元の本を用ひず、別に改めて拇指を以て鬼の目を抉る者を畫きて進む。後主、其の旨の如くせざるを怪しむ。筌對へて曰く、道元の畫く所の者は、眼色意思俱に第二指に在り。今、臣が畫く所は、眼色意思俱に拇指に在りと。後主悟り、乃ち筌が妄に筆を下さざるを喜ぶ。廣政癸丑の歳、新に八卦殿を構へ、筌に命じて四壁に於て四時の花竹鬼雄を畫かしむ。其年冬、五坊使、此殿前に於て、雄武軍の進むる所の白鷹を呈す。誤つて殿上の畫雉を認めて生と爲し、臂を擊すること數四。蜀主孟昶、歎異すること之を久しくし、遂に翰林學士歐陽炯に命じて、壁畫奇異記を撰せしめて以て之を旌す。乾德辛巳の年卒す。筌の次子居實、字は辭玉、少くして聰慧多能、其父と同じく蜀に事へて待詔と爲り、累遷して水部員外郎と爲る。亦、畫を善くし、傳家の妙を得、花鳥松竹を畫くに工なり。兼ねて善く字を作り、時に八分の書を以て名を知らる。年未だ四十ならずして卒す。○崔白、宋の崔白、字は子西、濠梁の人。畫に工にして、花竹翎毛、體製精贍なり。敗荷鳧雁を以て名を得たりと雖も、然れども佛道鬼神山林人獸に於て、精絶ならざるは無し。凡そ素に臨むに多くは朽を用ひず、復た能く直尺界筆を假らずして長紘挺刃を爲る。熙寧の初、命じて艾宣・丁貺・葛守昌と與に垂拱殿の御扆に鶴竹各〻一扇を畫かしむ。而して白、首出と爲す。後、圖畫院藝學に恩補せらる。白自ら性疎闊なるを以て、事を執ること能はざるを度り、固く之を辭す。初め宋の畫院、學者を教ふるに必ず黄筌父子を以て式と爲す。白及び吳元瑜が出づるに及びて、其格遂に變ず。白の弟懋、字は子仲、官、左班殿直に至る。花竹翎毛を畫くに工にして、

狀物布景、兄と相類す。尤も善く兎を作り、自ら一家を成す。○吳元瑜、宋の吳元瑜、字は公品、開封の人。武功大夫・合州團練使に累官す。花鳥人物山林を善くし、崔白に學ぶ。白描纖細、傅染鮮潤なり。能く世俗の氣、謂はゆる院體なる者を變ず。故に其筆、衆工の上に特出し、自ら一家を成す。○五代李氏、李夫人は、西蜀の名家なれども、未だ世系を詳かにせず。尤も書畫に工なり。郭崇韜、兵を帥ゐて來りて蜀を取り、掠めて之を得たり。夫人、崇韜が武人なるを以て、常に鬱悒して樂しまず。月夕獨り南軒に坐す。竹影婆娑たり。輒ち起ちて毫を濡して牕楮の上に摸寫す。明日、之を視れば、生意具足す。世人、之に效ひ、多く墨竹有りと云ふ。○孫位、唐の東越の人なり。後、異人に遇ひ、名を遇と改む。會稽山に居り、會稽山人と號す。性常に疎野、襟抱超然たり。好みて酒を飲むと雖も、未だ嘗て沈醉せず。禪僧道士、常に與に往還す。豪貴相請ひ、禮少しく慢なる有れば、縱ひ千金を贈るとも、一筆をも留め難し。唯だ好事者、時に其畫を得。畫く所の人物鬼神、龍水松石、墨竹鷹犬俱に精妙、筆勢超逸、氣象雄放なり。水を畫くこと神に入り、謂はゆる孫位の水は道に幾きなり。書に工にして、道術有り。○張立、晩唐の蜀中の人。畫、水墨多く、善く墨竹を寫す。李息齋の竹譜に、成都の大慈寺の灌頂院に張立の墨竹畫壁有り、と云ふ。○山谷、宋の黄庭堅、分寧の人、字は魯直、山谷道人と號す。進士に擧げらる。紹聖の初、鄂州に知たり。章惇・蔡京の惡む所と爲り、宜州に貶せらる。詩は專ら杜甫を學び、宋代の大家たり。又、行草書を善くし、亦、世に名有り。○杲日、明かなる太陽。○燭火、たいまつ。莊子に、日月出でたるに、燭火息まざるは、其の光に於けるや、亦難からずや、とあり。○一燈分焰、維摩經に、法門有り、無盡燈と名づく。汝等當に學すべし。無盡燈とは、譬へば一燈をもて百千燈に然すに、冥き者皆明かにして、明終に盡きざるが如し、とあるに本づく。○完顏楊軒、金の完顏璹、賜名たり。本名は壽孫、字は仲實、一字は子瑜、楊軒居士と號す。越王永功の子、密國公に封ぜらる。家藏の法書名畫、中秘書と等し。墨竹は自ら規矩を成す。佛像人物を兼ぬ。資質簡重、博學にして俊才有り。永功薨ぜしより後、日々に文士趙秉文等と友とし善し。宣宗南遷するや、盡く其家の法書名畫を載せ、一帙も遺さず、汴中に居る。俸食は少しと雖も、客至れば必ず酒穀蔬果を具へ、香を焚き茗を煮、盡く藏書を出し、樂しみて厭かず。宗室の中の第一流の人と爲す。書を任詢に學び、出藍の譽有り。眞草書に工なり。平生の詩文甚だ多し。自ら其詩を刪り、三百首・樂府一百首を存し、如菴小藁と名づく。年六十一にして薨ず。○自然老人、元代の人、姓は劉氏、其名を逸す。眞定祁州の人。兵後、燕に居り、墨竹禽鳥に工なり。○樂善老人、恐らくは元の顧信ならんと云ふ。信は字は善夫、崑山の人。大德の初、浙江軍器提擧と爲る。能書を以て稱せらる。晩年、樂善處士と號す。顧正之・韓紹曄・范廷玉等は、共に樂善老人を師として墨竹を善くせしこと、圖繪寶鑑に出づ。○王孟端、明の王紱（一に芾に作る）、字は孟端、友石生と號す。初め九龍山に隱る。又、九龍山人と號す。無錫の人。洪武の初、能書を以て薦められて翰林に入る。擢でられて中書舍人と爲る。山水は蒙を師とし、長江遠山、叢篁怪石、絶妙ならざるは無し、畫竹、當時第一と爲す。元の至正壬寅生れ、永樂丙申卒す。年五十五。○夏仲昭、明の夏昶なり。前に註す。○一花五葉、菩提達磨大師の偈に、吾本來東土、傳法救迷情、一華開五葉、結果自然成とあるに本づく。一華開五葉とは、達磨大師が、後來其道益々盛にして、臨濟・曹洞・雲門・法眼・潙仰の五宗の起るべきことを豫言せしなりと傳ふ。其說の當否は且く置き、此處にはこれを假りて、墨竹の畫

法、文與可・蘇東坡より後、之を學ぶ者益〻盛なるを言ふなり。○燈燈相傳、これも禪語にして、一燈、焰を分ちて他の燈に點じ、それより又他の燈に點じ、漸次に相續して斷えざるが如く、法脈相續して永く斷えざるを言ふ。今之を假りて、墨竹の畫法の益〻盛にして、轉轉して相續ぐを言ふなり。○丁子卿、宋の丁權、字は子卿、會稽の人。善く竹を寫し、自ら竹譜を述ぶ。○宋仲溫、明の宋克、字は仲溫、南宮里に家し、自ら南宮生と號す。長洲の人。善く竹を寫し、寸岡尺塹と雖も、千篁萬玉、雨疊み煙生じ、蕭然として塵俗の氣無し。博く書史に涉り、草隸、鍾王に通ず。少きとき任俠にして、素より氣節を以て自ら勵まし、韜略を究む。性抗直にして、人と議論し、必勝を期す。古を援きて今を切り、人、能く難ずる莫し。張士誠、之を羅致せんと欲すれども、就かず。高啓等と與に十友と稱し、詩は十才子と稱す。門を杜ぢて輪を染め、日に十紙を費す。善書を以て名あり。洪武の初、鳳翔同知に任ぜられ、卒す。○硃竹、朱竹なり。初めて朱竹を畫きしは、蘇東坡にして、東坡嘗て試院に在りしとき、偶〻興至れども、墨無く、傍に在りし朱筆を執つて畫きしなり。元の管夫人にも顯崖朱竹圖あり。陳眉公の妮古錄に據れば、宋仲溫が朱竹を畫きしも、亦試院に於ての事なり。○程堂、宋代の人、字は公明、眉州の人。進士に擧げられ、駕部郎中と爲る。墨竹は文同を宗とし、好んで鳳尾竹を畫く。善く園蔬を畫く。○解處中、南唐の江南の人、俗呼んで解將軍と爲す。何の謂なるかを知らず。善く雪竹を畫く、寒を冒すの意有り。其間に多く禽鳥を作る。或は羣聚し、或は孤立し、疎烈を曼るるが如し。○完顏亮、金の海陵の煬王なり。本名は迪古、字は元功、遼王宗輪の第二子なり。天德・貞元・正隆と兩元す。好んで方竹を畫き、奇致有り。天輔壬寅生る。位に在ること十二年、太宗、位に卽き、降して王に封ず。歲紀辛巳

亮ず。壽四十。謚して煬と曰ふ。○散聖、歷代傳法の祖師以外の高僧、例へば豐干・寒山・拾得・布袋和尚の如きをいふ。

【解】　李息齋が撰した竹譜に自ら謂つて居る、「墨竹を畫くことは、初めに王澹遊を學び、其父黃華老人の法を得た。黃華老人は遙に文湖州を慕うてそれを學んだのである。そこで予は文湖州の眞蹟を求めて、其奧妙を窺つた。予は更に古人の鈎勒著色の畫竹の法を研究しようと思ひ、上は王右丞・蕭協律・李頗・黃筌・崔白より、吳元瑜に及び、文湖州より以前は、ただ鈎勒著色の畫竹を習ひ尙んで居たことを知つた。或る人の說によれば、五代の時の李夫人が、月の光によつて牕の上に映し出された竹の影を描いて、始めて墨竹を寫した、と云ふことであるが、孫位や張立の墨竹が已に唐代に於て名高かつたことを考へると、墨竹は五代に始まつたのでは無い。黃山谷は、吳道子は竹を畫き、彩色を施さずして、其形、眞に逼つた、と曰つて居る。して見ると、墨竹は吳道子に始まつたのである。鈎勒著色の畫竹と墨竹との二つは、唐代の人は兩つながら之を善くしたのである。然し文湖州が出づるに及んで、始めて墨竹を專らとするやうになつた。これは眞に赫赫たる朝日が東天に昇つて炬火が皆消えてしまつ

たやうなものである。それから文湖州の法を師承する者は、代代其人が少くない。蘇東坡は同時代の人でありながら、文湖州に師事して居た』と。其時に、文湖州を師として學んだ人は、東坡をも師として學んだ。一箇の燈から焰を分つて、それからそれへと他の燈に點火して、古今を照らし耀かしたのである。其後、金には完顏楊軒あり、元には李息齋父子・自然老人・樂善老人あり、明には王孟端と夏仲昭とあり、眞に一花、五葉に開き、燈燈相續いだのである。故に文湖州・李息齋・丁子卿は、各〻竹譜を著はして其派の法を傳へた。其他、宋仲溫が朱竹を畫いたり、程堂が紫竹を畫いたり、解處中が雪竹を畫いたり、完顏亮が方竹を畫いたりしたやうな類は、諸譜以外の者であつて、これは禪宗に散聖が有るやうな者である。

畫墨竹法

畫竹必先立竿。立竿留節。梢頭須短。至中漸長。至根又漸短。忌擁腫近枯近濃。均長均短。竿要兩邊如界。節要上下相承。勢如半環。又如心字無點。去地五節。則生枝葉。畫葉須墨飽。一筆便過。不宜凝滯。其葉自然尖利。不桃不柳。輕重手相應。个字必破。人字筆必分。結項葉要枝攢鳳尾。左右顧盼。齊對均平。枝枝著節。葉葉著枝。風晴雨露。各有態度。翻正掩仰。各有形勢。轉側低昂。各有意理。當盡心求之。自得其法。若一枝不妥。一葉不合。則爲全璧之玷矣。

【譯】 竹を畫くには必ず先づ竿を立つ。竿を立て節を留むるに、梢頭は須く短かるべく、中に至つて漸く長く、根に至つて又漸く短し。擁腫・近枯・近濃・均長・均短なることを忌む。竿は兩邊・界の如くならんことを要す。節は、上下相承け、勢半環の如く、又、心字に點無きが如くならんことを要す。地を去ること五節にして、則ち枝葉を生ず。葉を畫くには須く墨飽き、一筆に便ち過ぐべし。宜しく凝滯すべからず。其葉自然に尖利にして、桃ならず柳ならず。輕重と手と相應じ、个字は必ず破り、人字は筆必ず分る。結頂の葉は、枝に鳳尾を攢め、左右顧盼、齊對均平ならんことを要す。枝枝、節に著き、葉葉、枝に著く。風晴雨露、各〻態度有り。翻正掩仰、各〻形勢有り。轉側低昂、各〻意理有り。當に心を盡して之を求め、自ら其法を得べし。若し一枝、妥ならず、一葉、合はずんば、則ち全璧の玷と爲らん。

【註】 竿は竹の幹なり。○梢頭、こずゑ。竹幹の末の方をいふ。○擁腫、ふくれて瘤の如きものあるをいふ。莊子逍遙遊篇に、其大本擁腫にして、繩墨に中らず、とあるに本づく。○近枯近濃、墨のかすれたるを枯と曰ひ、墨の十分につきたるを濃と曰ふ。一說に間枯間濃の誤なりといふ。墨のかすれた處が雜つたり、墨の十分につきたる處が雜つたりすること。李息齋の竹譜に據れば、此說從ふ可し。○均長均短、竹の幹の根もとより

末端に至るまで、節と節との間が同一に長きことと同一に短きこととをいふ。○兩邊如界、竹の幹の左右の兩邊がくつきりとして物の界の如くなるをいふ。○去地五節則生枝葉、地を出でて第五の節にして枝葉を生ずと曰へども、實際は必ずしも然るにあらず、第三の節より生ずることもあり、第七八節にして始めて生ずることもあり、斯くいふは蓋し大略をいふなり。必ずしもこの言に拘泥するを要せず。○一筆便過、一筆にて滯り無く畫くなり。○尖利、とがりてするどし。○个字必破、人字筆必分、葉を畫くには个の字又は人の字を幾つも重ねて畫くをいふ。个字必破とは、个の字の形の葉を畫きて个の字の形をくづすなり。人字筆必分とは、人の字の葉は二葉必ず分るべく、接觸せざるなり。○結頂葉、梢頭の葉。梢のささの葉なり。○枝攢鳳尾、枝に鳳凰の尾の如き形の葉を集むるをいふ。○左右顧盼、齊對均平、左右の鈎合宜しきをいふ。○翻正掩仰、翻正は反正と同じく、背向きの葉と正面に向きたる葉となり。掩仰は下へ向きたる葉と上へ向きたる葉となり。○轉側、ひつくりかへりたる葉と横向きの葉となり。○低昂、高きと低きとなり。翻正掩仰轉側低昂は、葉の形のいろ〳〵なる變化をいふなり。○妥、穩當なること。○全璧之玷、璧全體の瑕なり。全畫面を損ふに喩ふ。

【解】竹を畫くには必ず第一に竿を畫く。竿を畫きて、それから後に節を書き入れるのであるが、節と節との間の長さは、竿の末端の方は必ず短きことを要し、中間に至るに隨つて漸次に長く、根もとに至るに隨つて漸次に短くする。竿は、ふくれて瘤が出たり、墨がかすれた處があつたり、多すぎた處があつたり、節の間の長さが一樣に長かつたり短かつたりすることを嫌ふ。竿は左右の兩邊が物の界の如くくつきりとして居ることを要する。節は、上と下とが相承けて、筆勢は半分の環の如く、又、心の字に點の無きが如くなることを要する。葉を畫くには、筆に墨を十分に含ませて、一筆にさつと書くことを要する。筆が滯つてはならぬ。其葉は自然に尖つて利く、桃の葉のやうになつてはならぬ。柳の葉のやうになつてはならぬ。筆勢の輕重は手と相應じ、輕かるべきは手を動かすことも亦輕く、重かるべきは手を動かすことも亦重く、个の字の形の葉を畫くには个の字の形をくづし、人の字の形の葉は、二葉必ず分れて相接觸しないやうにする。梢の頭の葉は、鳳凰の尾の形の如き葉が枝に攢まるやうにし、左右離れ〳〵にならず、よく釣合の取れるやうにする。あらゆる枝は皆節から出で、すべての葉は皆枝から出でるやうにする。風の吹く時、晴れたる時、雨ふる時、露に濕へる時、各〳〵態度が異なつて居る。背面の葉、正面の葉、下へ向きたる葉、上へ向きたる葉、各〳〵形勢が違つて居る。ひつくりかへりたる葉、横に向きたる葉、低く垂れたる葉、高く伸びたる葉、各〳〵氣分が違つて居る。これ等は、銘々、心を盡して之を研究し、其法を自得すべきである。若し一本の枝、一枚の葉でも、妥當でない

者があるときは、全畫面の瑕となるであらう。

位置法

墨竹位置。幹節枝葉四者。若不由規矩。徒費工夫。終不能成畫。凡濡墨有深淺。下筆有重輕。逆順往來。須知去就。濃淡麄細。便見榮枯。生枝布葉。須相照應。山谷云。生枝不應節。亂葉無所歸。須筆筆有生意。面面得自然。四面團欒。枝葉活動。方爲成竹。然古今作者雖多。得其門者或寡。不失之於簡略。則失之於繁雜。或根幹頗佳。而枝葉謬誤。或位置稍當。而向背乖方。或葉似刀截。或身如板束。麄俗狠藉。不可勝言。其間縱有稍異常流。僅能盡美。至於盡善。良恐未暇。獨文湖州挺天縱之才。比生知之聖。筆如神助。妙合天成。馳騁於法度之中。逍遙於塵垢之外。從心所欲。不踰準繩。後之學者。勿陷於俗惡。知所當務焉。

【譯】 墨竹の位置は、幹節枝葉の四者、若し規矩に由らざれば、徒らに工夫を費し、終に畫を成すこと能はず。凡そ墨を濡ほすに深淺有り、筆を下すに重輕有り。逆順往來、須く去就を知るべく、濃淡麄細、便ち榮枯を見、枝を生じ葉を布くには、須く相照應すべし。山谷云ふ、枝を生ずること節に應ぜざるときは、亂葉、歸する所無し。須く筆筆、生意有り、面面、自然を得べし。四面團欒として、枝葉活動し、方に成竹と爲すと。然れども古今の作者、多しと雖も、其門を得る者は或は寡し。之を簡略に失せざれば、則ち之を繁雜に失す。或は根幹頗る佳なれども、枝葉謬誤す。或は位置稍や當れども、向背、方に乖く。或は葉、刀截に似、或は身、板束の如し。麄俗狠藉、言ふに勝ふ可からず。其間に縱ひ稍や常流に異なる有るも、僅に能く美を盡す。善を盡すに至りては、良に恐らくは未だ暇あらざらん。獨り文湖州、天縱の才を挺で、生知の聖に比し、筆は神助の如く、妙は天成に合し、法度の中に馳騁し、塵垢の外に逍遙し、心の欲する所に從へども、準繩を踰えず。後の學者、俗惡に陷る勿く、當に務むべき所を知れ。

【註】 此一章は李息齋の竹譜の中より抄錄したるなり。○墨竹位置、此章の原本たる竹譜には、此下に、『一如畫竹法但』の五字あり、『墨竹の位置は、一に畫竹の法の如し。但だ幹節枝葉の四者』云云と讀む。位置法とは、先づ畫絹又は紙の上に如何なる者を如何に畫くかを工夫する構圖法にして、この一章に位置法と名づけたるは、適切ならざるに似たり。竹譜の中には、別に畫竹の位置を論じたる一章あり。抄譯して以て參考に資す。其文に曰く、『位置、須く絹幅の寬窄横豎、幾竿を容る可きかを看るべし。根梢の向背、枝葉の遠近、或は榮或は枯、及び土坡水口、地面の高下厚薄、自意先づ定まりて、然る後に朽子を用ひて朽下す。再び看て意に可ならざるを得れば、且く筆を著くる勿れ。再び審かに看て改め朽し、意に可なるを得て、方に始めて墨を落す。後悔無きに庶からん。然れども畫家、自來、位置を最も難しと爲す。蓋し凡そ人情の尙好才品各各同じからず。所以に父子は至親なれども、亦、授受すること能はず。況んや筆舌の間に、豈に能く之を盡さんや。惟だ畫法の忌む所は、知らざる可からず。謂はゆる衝天、撞地、偏重、偏輕、對節、排竿、鼓架、勝眼、前枝、後葉、

此れを十病と爲す。斷じて犯す可からず。餘は各〻己が意に從へ。衝天撞地とは、梢、絹頭に至り、根、絹末に至り、阨塞塡滿する者を謂ふ。(昔は竹の全身を寫さねば不可とした。今は竹の中途の一部だけでも畫になる。いや、昔でも、鄭板橋の作、既に衝天の竹があつた。此邊、讀者の自由解釋が必要だ。)偏輕偏重とは、左右の枝葉、一邊には偏に多く、一邊には偏に少く、趁ふを停めざる者を謂ふ。對節とは、各竿節節相對するを謂ふ。と。○規矩、法式なり。○濡墨有深淺、墨を濡ほす深淺とは、墨色の濃さと淡さとをいふ。○往來、近さより遠きに往き、遠さより近きに來るとをいふ。○去就、取捨といふと同意。○圓欒、檀欒と同じ、竹の細長き貌。○成竹、出來あがりたる竹。○向背乖方、方は道なり。正面に向きたる者と背面に向きたる者との畫きかたが道理に叶はざるなり。○狼藉、物事の取り散らしてあること。亂雜にして條理無きをいふ。○不可勝言、言語の盡すところに非ざるをいふ。其數の甚だしく多きこと。○盡美盡善、論語八佾篇に、子、韶を謂ふ、美を盡せり、又、善を盡せりと。武を謂ふ、美を盡せり、未だ善を盡さざるなりと。とあるに本づく。○挺天縱之才、天縱は、論語子罕篇に、天、之に將聖を縱す、とあるに本づく。天より縱されたるなり。天賦といふが如し。天より縱されたる大なる才能が衆人に傑出するをいふ。○生知之聖、生れながらにして知るところの聖人なり。生知は、中庸に、或は生れながらにして之を知り、或は學びて之を知り、或は困しみて之を知る、とあるに本づく。○從心所欲、不踰準繩、準繩は法式をいふ。此二句は、論語爲政篇に、心の欲する所に從ひて、矩を踰えず、とあるに本づく。○後之學者、勿陷於俗惡、知所當務焉、竹譜には、故一依二其法一布列成レ圖、庶幾後之學者、不レ陷二於俗惡一、知レ所レ當レ務焉に作る。故に一に其法に依り、布列して圖を成さば、庶幾くは後の學者、俗惡に陷らず、當に務むべき所を知らん、と讀む。

【解】 墨竹を畫くには、先づ位置卽ち構圖が大切であり、幹と節と枝と葉との四つを描くに、若し法式に由らないときは、徒らに骨が折れるばかりで、終に畫を成すことが出來ない。凡そ墨を用ふるには、或は濃くすべき塲合があり、或は淡くすべき塲合がある。筆を下すには、時としては重くし、時としては輕くする。或は逆にすべき時あり、或は順にすべき時あり、或は遠きに往くべき塲合あり、或は近きに來るべき塲合あり、其取捨を知ることを要する。或は濃くし或は淡くし、或は麄にし或は細にして、榮えたると枯れたるとを示す。枝を描き葉を寫すには、左右上下の釣合の宜しきに適ふことを要する。黃山谷云ふ、枝を生ずるに節より出でざるときは、葉が亂雜になつて歸著するところが無い。必ず一筆々々に生生の意氣があり、一面々々に自然の趣を得ることを要する。斯くて左右上下の四面皆其趣致を得、枝葉皆活動して、始めて立派な竹が出來るのであると。然し、古今竹を畫いた人は多いけれども、其門を得て此境地に至つた人は少いやうである。或は簡略に過ぎて失敗して居る。或は繁雜にして失敗して居る。或は根もとや幹は惡くは無いけれども、枝や葉が誤つて居る。或

は構圖は稍や宜しいけれども正面の者と背面の者との畫きかたが理に悖つて居る。或は葉が刀で截つたやうな者も有る。或は幹が板を束ねたやうな者も有る。麁俗亂雜なること、列擧し盡されぬ。其間には聊か常人にすぐれた者があるとしても、それは僅に美を盡せるに過ぎない。善を盡くせる者とすることは、とても出來ないであらう。ただ文湖州のみは、天賦の才能遙に常人に傑出し、生れながらにして知るの聖人に比すべく、筆は神明の助あるが如く、妙は自然の化育に合致し、法度の中に縱横に馳せまはり、世俗の塵垢の外に逍遙自適し、思ふがままに筆を動かせども、法度の外に逸出することは無い。後の墨竹を學ぶ者は、必ず俗惡に陷ること無く、其の務むべき所の事を知らねばならぬ。

畫竿法

畫竿。若只畫一二竿。則墨色且得從便。若三竿之上。前者色濃。後者漸淡。若一色則不能分別前後矣。從梢至根。雖一節節畫下。要筆意貫穿。全竿留節。根梢宜短。中漸放長。每竿須要墨色勻停。行筆平直。兩邊圓正。若擁腫偏邪。墨色不勻。間有麁細枯濃。及節空勻長勻短。皆竹法所忌。斷不可犯。頗見世俗用蒲絵。槐皮。或疊紙濡墨畫竿。無問根梢一樣麁細。又且板平。全無圓意。但堪發笑。不宜傚效。

【譯】 竿を畫くに、若し只だ一二竿を畫くときは、則ち墨色且く便に從よを得。若し三竿の上なるときは、前なる者は色濃く、後なる者は漸く淡くす。若し一色なるときは、則ち前後を分別すること能はず。梢より根に至るまで、一節節に畫き下すと雖も、筆意貫穿せんことを要す。全竿に節を留むるには、根と梢とは宜しく短くすべく、中は漸く長からしむ。每竿、須く墨色勻停し、行筆平直に、兩邊圓正なるべし。若し擁腫偏邪、墨色勻しからず、間に麁細枯濃有り、及び節空勻長勻短なるは、皆、竹法の忌む所なり。斷じて犯す可からず。頗る世俗の蒲絵・槐皮或は疊紙を用ひて墨を濡ほして竿を畫くを見るに、根梢一樣に麁細なるを問よ無く、又且つ板平にして、全く圓意無し。但だ笑を發するに堪へたり。宜しく傚教すべからず。

【註】 此一章も李息齋の竹譜の中より抄錄したるなり。○從梢至根、從は原本には後に作る、今訂正す。○墨色勻停、墨色勻齊なり。濃きと淡きと入りまじらぬこと。○兩邊圓正、竿の左右の兩邊に圓みありて正しきこと。○擁腫、前に註す。○偏邪、竿の一邊がかすれること。○間有麁細枯濃、竹譜には間麁間細間枯間濃とあるを略したるなり。間は入り雜ること。麁は太きこと。細は細きこと。枯は墨のかすれたること。濃は墨の十分につきたること。一本の竿の中に、太い處があつたり、細い處があつたり、墨のかすれた處があつたり、墨

の濃い處があつたりするをいふ。○節空、竿を畫けども節無きこと。○勻長勻短、節と節との間が根より梢に至るまで一樣に長く、或は一樣に短きこと。○蒲絵、蒲の布。○板平、板の如く平かなること。

【解】竹竿を畫くには、若し只だ一二本を畫くならば、墨色は姑く便宜に從つて宜しい。若し三竿以上を畫くならば、前なる者は色を濃くし、後なる者はだん〳〵に色を淡くする。若し一色であるときは、前なる者と後なる者とを區別することが出來ない。又、梢より根に至るまで、一節一節畫き下すけれども、筆意は上から下まで貫通して居ることを要する。（此處では畫き下すと云つてあるが、竹は下から畫き上げると云ふのもある、其方が自然らしい。）一本の竿に節を入れるには、根もとと梢とは、節と節との間が短いが宜しく、中部はだん〳〵に長くする。一竿毎に、墨色は均しく、筆づかひは平かに直く、左右の兩邊は圓みがあつて正しいことを要する。若し竿がふくれて瘤があつたり、片側がかすれたり、墨色が均しくなかつたり、太い處が雜つたり、細い處が雜つたり、墨のかすれた處があつたり、墨の濃くついた處があつたり、節が無かつたり、節と節との間が下から上まで一樣に長かつたり、一樣に短かつたりすることは、皆、竹の法に於て嫌ふ所である。決して犯してはならぬ。世間には、往往、蒲の布や槐の皮や、疊んだ紙を以て墨を濡ほして竿を畫いて居る者があるが、それは、根から梢まで一樣に太かつたり一樣に細かつたりするのは言ふまでも無く、又、板のやうに平かであつて、まるで圓みが無い。まことに笑ふべきものである。その眞似をしてはならぬ。

畫節法

立竿既定。畫節爲最難。上一節要覆蓋下一節。下一節要承接上一節。中雖斷。意要連屬。上一筆兩頭放起。中間落下。如月少彎。則便見一竿圓混。下一筆看上筆意趣。承接不差。自然有連屬意。不可齊大。不可齊小。齊大則如旋環。齊小則如墨板。不可太彎。不可太遠。太彎則如骨節。太遠則不相連屬。無復生意。

【譯】竿を立つること既に定まれば、節を畫くこと最も難しと爲す。上の一節は、下の一節を覆蓋せんことを要し、下の一節は、上の一節を承接せんことを要す。中は斷えたりと雖も、意は連屬せんことを要す。上の一筆は兩頭放起し、中間落下し、月の少しく彎なるが如くなるときは、則ち便ち一竿の圓混なるを見る。下の一筆は、上筆の意趣を看て、承接して差はざるときは、自然に連屬の意有り。齊しく大にす可からず。齊しく小にす可からず。齊しく大なるときは則ち旋環の如く、齊しく小なるときは則ち墨板の如し。太だ彎なる可からず。太だ遠くす可からず。太だ彎なるときは則ち骨節の如く、太だ遠きときは則ち相連屬せず、復た生意無し。

【註】此章も李息齋の竹譜を抄錄したるなり。○覆蓋、上から下をおほふこと。覆は音フ。此字は二音あり、クツガヘス、又はクツガヘル意味のときは、音フク。オホフ意味のときは、音フ。○兩頭放起、中間落下、節の兩端が上へあがり、中間が下へさがること。○彎、弓なりに曲ること。○圓混、圓渾と同じ、圓みあること。○太遠、節を入れる處が餘りに離れ過ぎたること。

【解】竹竿を畫くことが既に定まつたならば、節を書きつれることは最も難いのである。上の一節は下の一節を覆ふことを要し、下の一節は上の一節を承けて接續することを要する。上の一節と下の一節との中は斷絶して居るけれども、意思は連續して居ることを要する。上の一筆は、兩端が上へあがり、中間は下へさがり、月が少し弓なりに曲つて居るやうであるときは、一竿に圓みが有るやうになる。下の一筆は、上の筆の意味を見て、それを承け接いで違はないときは、自然に連屬したる意思が現はれるのである。節を書き入れるに、上も下も一樣に大きくしてはならぬ。上も下も一樣に小さくしてはならぬ。上も下も一樣に大きいときは、旋環(圓い輪)をはめたやうになる。上も下も一樣に小さいときは、墨の板のやうになる。節を書き入れるに餘りに曲り過ぎてはならぬ。節を書き入れるところが餘りに離れ過ぎてはならぬ。節を書き入れるに餘りに曲りすぎるときは、骨の節のやうになる。節を書き入れるところが餘りに離れ過ぎるときは、上と下とが連續しないやうになり、生生の意思が無くなつてしまふ。

畫枝法

畫枝各有名目。生葉處。謂之丁香頭。相合處。謂之雀爪。直枝。謂之釵股。從外畫入。謂之垛疊。從裡畫出。謂之迸跳。下筆須要遒健圓勁。生意連綿。行筆疾速。不可遲緩。老枝則挺然而起。節大而枯瘦。嫩枝則和柔而婉順。節小而肥滑。葉多則枝覆。葉少則枝昂。風枝雨枝。觸類而長。亦在臨時轉變。不可拘於一律也。尹白郭王隨枝畫節。既非常法。今不敢取。

【譯】枝を畫くには各〻名目有り。葉を生ずる處、之を丁香頭と謂ひ、相合ふ處、之を雀爪と謂ひ、直枝、之を釵股と謂ひ、外より畫き入る、之を垛疊と謂ひ、裡より畫き出づる、之を迸跳と謂ふ。筆を下すには、須く遒健圓勁にして、生意連綿たるを要すべし。行筆疾速にして、遲緩す可からず。老枝は則ち挺然として起り、節大にして枯瘦なり。嫩枝は則ち和柔にして婉順、節小にして肥滑なり。葉多きは則ち枝覆ひ、葉少きは則ち枝昂る。風枝雨枝、類に觸れて長ず。亦、時に臨みて轉變するに在り。一律に拘る可からざるなり。尹白・郭王は、枝に隨つて節を畫く。既に常法に非ず。今、敢て取らず。

【註】 此章も李息齋の竹譜を抄錄したるなり。○丁香頭、丁香は丁子なり。○雀爪、雀の爪に似たるを以て此名あり。○釵股、かんざしの足。○垜疊、積み累ぬるなり。○迸跳、ほとばしり、をどりあがるなり。○尹白、宋の汴の人、專ら墨花に工なり。○鄆王、名は楷、初の名は煥、宋の徽宗の第三子。始め魏國公に封ぜられ、高密郡王に進み、十一節度使を歷たり。政和乙卯、進士を廷策す。名を唱ふること第一。花鳥極めて精到と爲し、尤も墨花を善くす。並に水墨の筍竹及び墨竹・蒲竹等の圖有り。稟資秀拔、學を爲すこと精到なり。性、畫を嗜み、頗る儲蓄多し。凡そ珍圖を得れば、卽日上進す。而して御府の賜ふ所の絕品も、亦復た少からず。故に王府の藏むる所の畫目數千計。靖康の初、北に遷り、韓州に薨ず。

【解】 枝を畫くに就いては、それ〴〵名稱が附けられて居る。葉の出る處は、丁香頭と謂ふ。枝と枝とが相合ふ處は、雀爪と謂ふ。眞直なる枝を、釵股と謂ふ。外卽ち上より畫き入れるのを、垜疊と謂ふ。裡卽ち下より畫き出すのを、迸跳と謂ふ。筆を下すには、必ず遒健圓勁にして生生の意思の連續して絕えないことを要する。運筆は迅速であつて、遲緩してはならぬ。古い枝は挺然として强く出で、節は大きくして瘦せて居る。若い枝は、和柔にして婉順であり、節は小さくして肥つて滑かである。葉の多いのは枝がうつむき、葉の少いのは枝が昂つて居る。風に吹かるる枝、雨ふるときの枝など、類に隨つて工夫し、亦、時に臨んで變化しなければならぬ。一法に拘泥してはならぬ。尹白や鄆王は、枝に節を畫いたが、これは普通の法では無いので、今、ここに採用しなかつた。

畫葉法

下筆要勁利。實按而虛起。一抹便過。少遲留則鈍厚不銛利矣。然寫竹者。此爲最難。虧此一功。則不復爲墨竹矣。法有所忌。學者當知。麄忌似桃。細忌似柳。一忌孤生。二忌並立。三忌如叉。四忌如井。五忌如手指。及似蜻蜓。露潤雨垂。風翻雪壓。其反正低昂。各有態度。不可一例抹去。如染皁絹無異也。

【譯】 筆を下すには勁利ならんことを要す。實按して虛起し、一抹して便ち過ぐ。少しく遲留するときは、則ち鈍厚にして銛利ならず。然れども竹を寫す者、此れを最も難しと爲す。此一功を虧くときは、則ち復た墨竹と爲らず。法、忌む所有り、學者當に知るべし。麄なるは桃に似たるを忌む。細なるは柳に似たるを忌む。一は孤生を忌む。二は並立を忌む。三は叉の如きを忌む。四は井の如きを忌む。五は手指の如く及び蜻蜓に似たるを忌む。露潤雨垂、風翻雪壓、其反正低昂、各〻態度有り。一例に抹し去りて染皁絹の如く異なる無かる可からざるなり。

【註】 此章も李息齋の竹譜を抄錄したるなり。○勁利、つよく、するどきこと。○實按而虛起、はじめに力を

入れて筆をおさへて、後に力を拔きて筆をはねるなり。實は力を入れること。虛は力を拔くこと。按は筆をおさへること。起は筆をはねること。○一抹便過、勢よく一筆にて畫くこと。○遲留、筆を運ぶこと遲くしてぐづ〳〵すること。○銳利、銳利なり。とがりてするどきこと。○一功、一つの工夫。○孤生、ただ一葉のみ飛び離れて畫くこと。○並立、二葉が同じ大きさ又は同じ形にて並び立ちたること。○叉、原本には乂に作る。今、竹譜に據りて訂正す。○反正低昂、反は葉の翻つて裏を見せたるもの、正はおもての見える葉。低は丁香頭のたれたるもの、昂はその上に向きたるもの。この四字、竹譜には、翻正向背轉側低昂に作る。○染皁絹、黑く染めたる絹。

【解】 筆を下すことが勁く利くなければならぬ。初に力を入れて筆をおさへて、後に力を拔いて筆をはねて、一筆で勢よく畫くのである。少しでも筆が遲く留まるときは、鈍く厚くなつて、尖つて銳くならぬ。けれども竹を寫すには、葉を畫くことが最も難い。この一つの工夫が無いときは、墨竹には爲らないのである。葉を畫く法に、嫌ふ所がある。學者は心得て置かねばならぬ。一枚の葉は、ただ一葉のみ飛び離れて出て居ることを嫌ふ。二枚の葉は、同じ大さと同じ形にて並び立ちたることを嫌ふ。三枚の葉は、叉の字の如き形になることを嫌ふ。四枚の葉は、井の字の如き形になることを嫌ふ。五枚の葉は、手の指の如く及び蜻蜓の如き形になることを嫌ふ。露に潤うたのや、雨の爲めに下へ垂れたのや、風に吹かれて翻つたのや、雪に壓へつけられたのは、葉の裏を見せたのや、表を見せたのや、下へ垂れたのや、上へ高く昂つたのやに就いて各態度が違つて居る。一概になぐり書きして黑く染めた絹のやうになつてはならぬのである。

勾勒法

先用柳炭將竹竿朽定。再分左右枝梗。然後用墨筆鈎葉。葉成。始依所朽。竿枝與節。一一畫出。俾枝頭鵲爪盡與葉連。要穿釵躲避。方見層次。竿之前後。墨分濃淡。鈎出前宜濃。後宜淡。此乃勾勒竹法。其陰陽向背。立竿寫葉。與墨竹法同。可類推之。

【譯】 先づ柳炭を用ひて竹竿を朽定し、再に左右の枝梗を分ちて、然る後に墨筆を用ひて葉を鈎す。葉成りて、始めて朽する所に依りて、竿枝と節と、一一畫き出し、枝頭の鵲爪をして盡く葉と連ならしむ。穿釵躲避せんことを要す。方に層次を見る。竿の前後は、墨、濃淡を分ちて鈎し出す。前なるは宜しく濃かるべく、後なるは宜しく淡かるべし。此れ乃ち勾勒の竹法なり。其陰陽向背、竿を立て葉を寫すことは、墨竹の法と同じ。之を類推す可し。

【註】勾勒法、兩側より細き線を以て輪郭を畫く法なり。○柳炭、木炭なり。○朽定、木炭を以て位置を定むるなり。○枝梗、梗も枝なり。○鵲爪、原本に鳴爪に作れるは誤なり。今訂正す。雀爪と同じ。○穿叙躲避、さしこんだり、さけたりすること。穿叙は、もと、頭髪にかんざしをさすこと。躲避は、體をひらりとかはして逃げること。他の葉や枝の下に葉や枝を書き入れたり、他の葉や枝に觸れないやうに書き入れたりするに喩ふ。○層次、かさなり合つて居る次第。

【解】先づ木炭を用ひて竹竿の位置を定め、それから左右に出て居る枝や梗を書き分けて置いて、然る後に墨筆を用ひて葉の輪郭を書く。葉が出來あがつて後に、始めて前に木炭を以て定めて置いたところに從つて、竿と枝と節とを、一一畫き出し、枝の頭の鵲爪が殘らず葉と連なるやうにする。それには他の葉や枝の下に別に葉や枝を書き入れたり、他の葉や枝の極近くにそれに觸れないやうに別に葉や枝を書き入れたりすることを要する。そして始めてだん〳〵に重なり合つて居る次第が現れるのである。竿の前なる者と後なる者とは、濃い墨と淡い墨とを以て畫き出すのであつて、前なる者は濃いが宜しく、後なる者は淡いが宜しい。これが勾勒の竹を畫く法である。其陰陽や正面背面や、竿を書いたり葉を寫したりすることは、墨竹の法と同じいのである。類を以て推して知ることが出來る。

畫墨竹總歌訣

黃老初傳用勾勒。束坡與可始用墨。李氏竹影見橫牕。息齋夏呂皆體一。幹篆文。節邈隸。枝草書。葉楷銳。傳來筆法何用多。四體須當要熟備。絹紙佳。墨休稠。筆毫純。勿開頭。末下筆時意在先。葉葉枝枝一幅週。分字起。个字破。疎處疎。墮處墮。墮中切記莫糊塗。疎處須當枝補過。風竹勢。幹挺然。墮處逆。幹須偏。鳥鴉驚飛出枝去。雨竹橫眠豈兩般。晴竹體。人字排。嫩一疊。老兩釵。先將小葉枝頭起。結項還須大葉來。寫露竹。雨彷彿。晴不傾。雨不足。結尾露出一梢長。穿破个字枝頭曲。寫雪竹。貼油袱。久雨枝。下垂伏。染成鉅齒一般形。揭去油袱見氷玉。一寫法。識竹病。筆高懸。勢要俊。心意疎懶切莫爲。精神魂魄俱安靜。忌杖鼓。忌對節。忌挾籬。忌邊壓。井字蜻蜓人手指。瞽眼桃葉并柳葉。下筆時莫要怯。須遲疾。心暗訣。寫來敗筆積成堆。何怕人間不道絕。老幹參。長梢拂。歷氷雪。操金玉。風晴雨雪月烟雲。歲寒高節藏胸腹。湘江景。淇園趣。娥皇詞。七賢句。萬竿千畝

總相宜墨客騷人遭際遇

【譯】黄老初めて勾勒を用ふるを傳へ、東坡與可始めて墨を用ふ。李氏は竹影態に横たはるを見、息齋夏呂皆體一なり。幹は篆文、節は邊隷、枝は草書、葉は楷鋭。傳へ來る筆法何ぞ多きを用ひん、四體須く當に熟備するを要すべし。絹紙は佳、墨は稠きを休めよ。筆毫は純、頭を開く勿れ。未だ筆を下さざる時に意先に在り、葉葉枝枝一幅に遍る。分字起り、个字破る。疎處は疎に、墮處は墮なれ。墮の中切に記して糊塗する勿れ、疎處は須く當に枝をもて過を補ふべし。風竹の勢は、幹挺然たり。墮處は逆に、幹は須く偏なるべし。烏鴉驚き飛んで枝を出で去る。雨竹横に眠る豈に兩般ならんや。晴竹の體は、人字排ぶ。嫩は一疊、老は兩叡。先づ小葉を將て枝頭に起し、結頂は還つて須く大葉來るべし。露竹を寫すには、雨彷彿たり。晴にも傾かず、雨にも足らず。結尾露出して一梢長く、个字を穿破して枝頭曲る。雪竹を寫すには、油衩を貼す。久雨の枝は、下に垂れ伏す。鉅齒と一般の形を染め成し、油衩を揭去すれば氷玉を見る。寫法を一にし、竹の病を誡れ。筆は高く懸け、勢は俊なるを要す。心意疎懶なれば切に爲す勿れ、精神魂魄俱に安靜なれ。杖鼓を忌み、對節を忌み、挾雜を忌み、邊壓を忌む。井字蜻蜓人の手指、晉眼桃葉并に柳葉。筆を下す時、怯なるを要する莫かれ。須く遲疾にして、心に訣を暗んすべし。寫し來りて敗筆積んで堆を成さば、何ぞ怕れん人間・絶と道はざるを。老幹參はり、長梢拂ひ、氷雪を歴、金玉を操り、風晴雨雪月烟雲、歳寒の高節・胸腹に藏す。湘江の景、淇園の趣、娥皇の詞、七賢の句、萬竿千畝總て相宜しきは、墨客騷人遭際して遇ふ。

【註】黄老、黄筌なり。○夏呂、夏昶と呂端俊。○幹篆文、節邊隷、枝草書、葉楷鋭、幹を畫くには篆書の文字の如くなるべく、節は秦の程邈の隷書の如くなるべく、枝は草書の如くなるべく、葉は楷書の鋭きが如くなるべし。元の柯九思曰く、竹を寫すには、幹は篆法を用ひ、枝は草書の法を用ひ、葉は八分の法を用ひ、或は魯公の撥筆の法を用ふと。明の王紱曰く、竹を畫く法、幹は篆の如く、枝は草の如く、葉は眞の如く、節は隷の如しと。○四體、幹は篆文、節は邊隷、枝は草書、葉は楷鋭といへる四句をさす。○熟備、精熟し具備すること。○勿開頭、筆の穗先がわれてはならぬ。○分字起、以下六句は葉を畫くに就いて云ふ。○疎處、葉のまばらなる處。○墮處、葉の形のくづれたる處。○風竹勢、以下の四句は風竹を畫くに就いて云ふ。○墮處逆、葉の形のくづれたる處は主として風に逆ふところに在るを云ふ。○烏鴉驚飛出林去、雨竹横眠豈兩般、此二句は雨竹を畫くに就いて云ふ。横眠は、雨ふる時の竹が横に伏したる形をいふ。○晴竹體、以下の六句は晴れたる日の竹を畫くに就いて云ふ。○人字排。人の字の形の葉を排列するをいふ。○寫露竹、以下の六句は露に濡れたる竹を畫くに就いて云ふ。○寫雪竹、以下の六句は雪の積れる竹を畫くに就いて云ふ。○油衩、油を塗りたるふくさ。我が國にては油紙を用ふれば善し。油紙を其の欲する所の形に切り置き、雪の積りたる竹を畫かんとする所へ置き、左手にて押へ、其上から下の絹又は紙を染るときは、油紙に隔てられたる所、皆、雪となる。緣薑といふ。(此方法はやゝ職工的で問題だ、必ずしも善しとは云へない)○久雨枝、久しく雨又は雪の降りたる枝。○鉅齒、大なる齒。○氷玉、雪竹をいふ。○杖鼓、對節、挾雜、邊壓、此四つは幹を畫くに就いて忌むところなり。杖鼓は、一節の節が太く高く、その中央が細くして、鼓の胴の如き形したるをいふ。對節は、各竿の節が並列して相對するをいふ。挾雜は、編籬、罟眼、勝眼とも云ふ。竿と竿とが組み合ひて四角なる穴を作りた

るをいふ。葉に就いての井字と同じ形なるなり。邊壓は、偏邪のことにして、竿の片側がかすれたるをいふ。○井字、蜻蜓、人手指、晉眼、桃葉、柳葉、この六つは葉を寫すに就いて忌む所なり。晉眼は、葉の兩端が同じく尖りて四手網の眼の如くなりたるをいふ。○湘江、一名湘水、湖南省の川の名。竹の名所なり。○淇園、竹の名所なり。述異記に曰く、衛に淇園有り、竹を出す。淇水の上に在り。詩に云ふ、彼の淇の澳を瞻れば、綠竹猗猗たりと。是れなりと。○娥皇、帝堯の長女にして、帝舜の妃なり。妹女英も亦帝舜の妃なり。傳說によれば、舜、南方を巡狩し、蒼梧の野に崩ずるや、娥皇・女英追うて至り、帝を哭すること極めて哀しく、淚竹に染まる。今の湘妃竹(卽ち斑竹)の斑紋あるは、その淚痕の然らしむる所なりと云ふ。○七賢、晉の嵇康、河內の山陽に寓居し、阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎、並に相與に友とし善く、竹林の遊を爲す。世、竹林七賢と稱す。○墨客騷人、風雅の士。詩歌文章書畫を善くする人をいふ。

【解】　黃筌老人が初めて勾勒の法を用ひて竹を畫くことを傳へ、蘇東坡と文與可とが始めて專ら墨を用ひて竹を畫いた。李夫人は竹の影が牕に橫たはつて居るのを見てそれを寫した。その後、李息齋・夏昶・呂端俊は皆一體の人であつて、同じく墨を用ひて竹を畫いた。竹を畫くには幹は篆書の如くし、節は隸書の如くし、枝は草書の如くし、葉は銳い楷書の如くする。昔からの傳來の筆法は大層數多くあるが、必ずしもそれを殘らず用ひるに及ばぬ。この四つの體は必ず習熟し具備することを要する。絹や紙は佳良なる者を用ひる。墨は餘りに濃くしてはならぬ。筆は毛の純粹なる者を用ひる。筆の穗先が割れてはならぬ。未だ筆を下さざる時に意思は筆より先に在らねばならぬ。あらゆる葉や枝が皆一幅の中にまとまるやうにする。葉を畫くには、分の字や个の字の如き形を以て寫して、その字體をくづすのである。そして疎になつた處は疎のままにしておき、形のくづれた處はくづれたままにして置く。形のくづれた處は必ず後から墨を加へたりなどしてごまかしてはならぬ。葉の疎なる處は必ず枝を書き入れてその過失を補ふやうにする。風竹の勢は、幹が挺然として風に屈せず拔きんでて居る。葉の形のくづれた處は主として風に逆ふところに在り、幹は必ず偏つて居るやうにする。雨竹が橫に伏したる形は、鴉が驚いて林の中から飛び出して行くが如くである。晴竹の體は、葉を寫すに人の字を排列したやうにする。若い竹ならば一葉を疊ねる。老竹ならば釵の足の如く二葉を疊ねる。先づ小さい葉を枝の頭に書き、結頂にはまた大きい葉を寫す。露竹を寫すには、雨竹と稍や似て居るけれども、晴竹とも違ふし、雨竹とも違ふ。晴竹と雨竹との間の氣分である。結尾に一本の長い梢を出して、个の字の形の葉を穿つて延びて枝の頭は曲つて居るやうにする。雪竹を寫すに

は、久しく雪のふり積もつた枝は下に垂れ伏して居るものであるから、先づ下に垂れ伏した竹を畫き、其上に油を塗つた袱紗を置き、それを自分の思ふやうな形に切り、その上から絹や紙の上に、大きい齒のやうな形に染めて行き、それから油を塗つた袱紗を取り除けると、雪の積つた竹が現はれるのである。この竹を寫す法を專一に守り、そして竹を畫くに就いての病を識らねばならぬ。筆は高く懸腕にして持ち、勢は俊利なることを要する。氣分の懶い時には斷じて竹を寫してはならぬ。精神も魂魄も俱に安靜でなければならぬ。竹の幹を畫くには、杖鼓を忌み、挾籬を忌み、邊壓を忌む。葉を寫すには、井字の如くなることを忌み、蜻蜓の如くなることを忌み、人の手指の如くなることを忌み、臂眼の如くなることを忌み、桃の葉の如くなることを忌み、柳の葉の如くなることを忌む。筆を下すときには怯懦になつてはならぬ。筆を運ぶことは、遲くすべきときには遲くし、疾くすべきときには疾くすることを要する。そして心に此歌訣を諳んじて居るが善い。敗筆が積もつて堆を成すほど寫し習うたならば、必ず世間から絶品と賛歎されるに至るであらう。老いたる幹が相參はり、長き梢が空を拂ひ、氷雪の寒苦を經れども、節操は金玉の如く、風に吹かるる竹、晴れたる日の竹、雨ふる時の竹、雪の積もれる竹、月に照らされたる竹、煙の籠めたる竹、雲のかかれる竹、各〻風情あり、歳寒にも色を變へざる高き節操をば、胸腹の中に藏してゐなければならぬ。湘江や淇園の風景情趣、娥皇女英や竹林七景を詠じたる詩歌文章を會得し、萬竿千畝の竹すべて可ならざる無き、風流韻事を解したる人は、容易に遇ひ難いのである。（終の六句は、種々に解釋し得らるる意味不明瞭の句であるが、姑く上の如く解しておく。）

畫竿訣

竹幹中長上下短只須彎節不彎竿竿竿點節休排比濃淡陰陽細審觀。

【譯】竹幹は中ごろ長く上下短し。只だ須く節を彎すべく竿を彎せず。竿竿に節を點ずるに排比する休かれ。濃淡陰陽細審に觀よ。

【註】只須彎節不彎竿、曲りたる竹竿を畫くには、ただ節のところに於て曲げるべく、節と節との間の竿を曲げてはならぬ。○排比、一竿の節が他の竿の節と相並ぶこと。

【解】竹幹は、節と節との間が中部に於ては長く、上と下とに於ては短い。彎曲したる竹幹を畫くには、ただ節の處に於て彎曲させるのであつて、竿を彎曲させてはならぬ。幾本かの竹幹に節を書き入れるのに、節と節とが並んで居るやうにしてはなら

ぬ。濃淡と陰陽とを細審に觀察するが善い。

點節訣

竿成先點節。濃墨要分明。偃仰須圓活。枝從節上生。

【譯】竿成れば先づ節を點ず。濃墨、分明ならんことを要す。偃仰須く圓活なるべし。枝は節上より生ず。

【註】圓活、圓轉活潑。變化自在なること。

【解】竹竿が出來あがれば先づ節を書き入れる。節を書き入れるには、濃墨を以て、明瞭に書き入れることを要する。或は下に向き、或は上に向き、變化自在であらねばならぬ。そして枝は節の上から出るやうにする。

安枝訣

安枝分左右。切莫一邊偏。鵲爪添枝梢。全形見筆端。

【譯】枝を安くには左右に分つ。切に一邊に偏る莫かれ。鵲爪、枝梢を添へ、全形、筆端に見はる。

【註】安枝、枝を安置する意にて、枝を書き入るること。○鵲爪、枝から枝を生じて三本になりたるをいふ。

【解】枝を書くには左右に分れるやうにする。決して左右の一方に偏つてはならぬ。鵲爪の如く枝や梢を書き添へると、竹の全形が筆の先から見はれる。

畫葉訣

畫竹之訣。惟葉最難。出於筆底。發之指端。老嫩須別。陰陽宜參。枝先承葉。葉必掩竿。葉葉相加。勢須飛舞。孤一迸二。攢三聚五。春則嫩篁而上承。夏則濃陰以下俯。秋冬須具霜雪之姿。始堪與松梅而爲伍。天帶晴兮偃葉而偃枝。雲帶雨兮墜枝而墜葉。順風不一字之排。帶雨無人字之列。所宜掩映以交加。最忌比聯而重疊。欲分前後之枝。宜施濃淡其墨。葉有四忌。兼忌排偶。尖不似蘆。細不似柳。三不似川。五不似手。葉由一筆。以至二三。重分疊个。還須細安。間以側葉。細筆相攢。使比者破。而斷者連。竹先立竿。生枝點節。考之前人。俱傳口訣。竹之法度。全在乎葉。因增舊訣。爲長歌。用廣前人之法則。

【譯】竹を畫くの訣は、惟れ葉最も難し。筆底より出で、之を指端に發す。老嫩は須く別つべく、陰陽は宜しく參ふべし。枝は先づ葉を承け、葉は必ず枝を掩ふ。葉葉相加はり、勢は須く飛舞すべし。孤一迸二、攢三聚五。春は則ち嫩篁にして上に承け、夏は則ち濃陰にして以て下に俯す。秋冬は須く霜雪の姿を具ふべし、始め

て松梅と伍を爲すに堪へたり。天、晴を帶ぶれば偃葉にして偃枝、雲、雨を帶ぶれば墜枝にして墜葉。風に順ふは一字の排にあらず、雨を帶ぶるは人字の列無し。宜しく掩映して以て交〻加ふべき所は、最も比聯して重疊するを忌む。前後の枝を分たんと欲せば、宜しく濃淡を其墨に施すべし。葉に四忌有り、兼ねて排偶を忌む。尖なるは蘆に似ず。細なるは柳に似ず。三なるは川に似ず。五なるは手に似ず。葉は一筆より、以て二三に至り、分を重ね个を疊み、還た須く細に安んずべし。間ふるに側葉を以てし、細筆相攢め、比べる者をして破れて、斷えたる者をして連ならしむ。竹は先づ竿を立て、枝を生じ節を點ず。之を前人の、倶に口訣を傳ふるに考ふれば、竹の法度は、全く葉に在り。因つて舊訣を增して長歌と爲し、用て前人の法則を廣む。

【註】畫葉訣の大部分は、張退公の墨竹記に據りたるなり。張退公は、佩文齋書畫譜に、何の代の人なるかを知らず、畫苑補益には李衍の後に附く、と註せり。○枝先承葉、葉を承けるために先づ枝を描くをいふ。○嫩篁、若き竹。○濃陰、竹の葉繁りて濃き陰あるなり。○偃葉而偃枝、葉も枝も下へ向きたるなり。○墜枝而墜葉、枝も葉も下へ垂れ下りたるなり。○順風、風に吹かるるなり。○一字、人字、一の字の形の葉、人の字の形の葉、○掩映、掩翳と同意。おほひかざして、かげにすること。葉の繁りたるをいふ。○比聯、ならびつらなる。○排偶、同じ形の者の並びたること。○側葉、横に向きたる葉。○口訣、口傳なり。

【解】竹を畫くの祕訣は、葉を畫くことが最もむつかしい。葉を畫くには、筆の穗の根もとから出でて、指の先で書きあらはす。舊い葉と若い葉とは書き別けることを要する。陰と陽とは相交はるやうにするが宜しい。陰ばかり又は陽ばかりでは宜しくない。葉を寫すには先づ葉を承くべき枝を描き、葉は必ず枝を掩ふやうにする。葉の上にまた葉を加へ寫すのであつて、その勢は鳥の高く空中に飛びまはり舞ひ遊ぶが如くなることを要する。一枚の葉を孤葉といひ、二枚なるを逆葉といひ、三枚なるを攢葉といひ、五枚なるを聚葉といふ。春の葉は若竹であつて上に向いて居り、夏の葉は繁つて濃き陰をつくつて下に向いて居る。秋冬の葉は霜や雪に傲る姿を具へることを要する。斯くて始めて松や梅と同列になることが出來る。天の晴れた時には葉も枝も下に向いて居り、雨の降る時には枝も葉も垂れ下つて居る。風に吹かれる葉は一の字を排べたやうにしてはならぬ。雨の降る時の葉は人の字を列ねたやうにしてはならぬ。葉が繁つて掩ひ翳して居るべき所を畫くには、葉と葉とが比び聯なつて重なり合ふことを最も忌むのである。前なる枝と後なる枝とを書き分けるには、濃い墨と淡い墨とを以て現はすが宜しい。葉を寫すには四つの忌む可き事があり、又、同じ形の葉が並んで出て居ることを忌む。四つの忌むべき事とは、葉の尖つた者は蘆の葉に似てはならぬ、細い者は柳の葉に似てはならぬ、三枚の者は川の字の形に似てはならぬ、

五枚の者は手の形に似てはならぬ。葉は一筆の者もあり、二筆の者も有り、三筆の者も有り、分の字の形の者を重ねたり、个の字の形の者を疊ねたりするのであるが、それ等の者は、仔細に觀察して適當なる者を適當なる處に置くことを要する。それ等の葉の間に横向きの葉を雜へ、細い筆を以て攢めて書き入れて、比んで居る者の形が破れ、斷えたる者が連續するやうにする。竹を畫くには先づ竿を書き、枝を描き、節を入れるのであるが、古人は皆口訣を傳へられた、その口訣によつて考へると、竹の法度は、全く葉に在るのである。因つて昔からの口訣を增して長歌を作り、古人の法則を廣くした。

發竿點節式（竿を發し節を點ずる式。竹幹を描き節を附ける法式）

初起手一筆（書き始めの一筆）

點節乙字上抱（乙字の形の如く上へ向きたる節の附けかた）

點節八字下抱（八字の形の如く下へ向きたる節の附けかた）

起手二筆三筆の直竿（竹幹の書きかた）

細竿（細き竹幹）

斷竿（先の折れたる竹幹）

解籜（老いたる筍。籜は筍の皮なり。解籜とは筍伸びて皮の脱に脱せんとするをいふ。）

直竿帶曲（竹幹の稍や曲りたるもの）

發竿式（竿を發する式。竹幹を畫く法式）
垂梢（下に向つて垂れたる梢）
根下の竹胎（根もとのたけのこ）

横竿（横になりたる竹幹）
露根（地上にあらはれたる根）
根下の笋鞭（竹の地下莖を笋鞭といふ）

生枝式（枝を生ずる式。枝を書く法式）

起手鹿角枝（鹿の角の形に似たる枝）

魚骨枝（魚の骨の形に似たる枝）

頂梢、枝を生ず（頂上の梢から枝が出た）

鵲爪枝（鵲の爪の形に似たる枝）

左右に旁枝を生ず（左右に枝が出た）

根下に枝を生ず（根もとから枝が出た）

生枝式

發竿生枝式（竿を發し枝を生ずる式。竹幹と枝とを畫く法式）

老竿、枝を生ず（舊い幹から枝が出た）

嫩竿（どんかん）、枝を生ず（若竹の幹から枝が出た）

細篠（さいじょう）、枝を生ず（細いしの竹から枝が出た）

雙竿、枝を生ず（二本の竹幹から枝が出た。双は雙の俗字）

布仰葉式（仰葉を布く式。上（向きたる葉を畫く法式）

一筆横舟（一筆を以て畫く、横たはりたる舟の形に似たる葉）

一筆偃月（偃月は半弦の月をいふ。其形半ば偃す、故に名づく。下へ向きたる三日月の形に似たる葉）

二筆魚尾（二筆を以て畫く、魚の尾の形に似たる葉）

三筆飛雁（三筆を以て畫く、空飛ぶ雁の形に似たる葉）

三筆金魚尾（金魚の尾の形に似たる葉）

四筆交魚尾（四筆を以て畫く、魚尾を交へたる形に似たる葉）

五筆交魚雁尾（五筆を以て畫く、魚尾と飛雁とを交へたる葉）

六筆雙雁（六筆を以て畫く、二頭の飛雁の形に似たる葉）

布偃葉式（偃葉を布く式。下（向きたる葉を畫く法式）

一筆片羽（一筆を以て畫く、一枚の羽の形に似たる葉）

二筆燕尾（燕の尾の形に似たる葉）

三筆个字（个の字の形に似たる葉）

四筆鸂鶒（驚きて飛び立つ鶒の形に似たる葉）

四筆落雁（空から下りて來る雁の形に似たる葉）

五筆飛燕（空飛ぶ燕の形に似たる葉）

七筆、雙个字を破る（二つの个の字をくづしたる形の葉）

布葉式（葉を布（し）く式。葉を畫く法式。原本、布葉式の三字を脫す）

五筆、才字を破る（分の字の形をくづしたる葉を畫く法式）

六筆、个字を破る（个の字の形をくづしたる葉を畫く法式。原本、六筆破个字の五字を脫す）

分字を疊（たた）む（分の字の形の葉を重ねる法式。疊は疊の俗字）

結頂式（頂を結ぶ式。梢の頭の葉の畫きかた）

葉を布き枝を生ずる結頂（葉と枝とを畫きたる結頂の法）

老葉出梢の結頂（舊き葉と梢とを畫きたる結頂の法。原本、老葉出梢結頂の六字を脱す）

嫩葉出梢の結頂（若き葉と梢とを畫きたる結頂の法）

垂梢式(下に垂れたる梢を畫く法式)

垂梢式

墻を過ぐる大小の二梢(かきねを通り越し來りて垂れ下りたる大小の二つの梢)

過墻大小二梢

横梢式（横になりたる梢を畫く法式）

新篁斜に嫩枝を墜す（若竹から斜に下に向つて若き枝を出した）

横梢式

新篁斜墜嫩枝

出梢式（出でたる梢を畫く法式）

新篁、籜を解く右梢（若い竹が皮をおとして右より出でたる梢）

出梢式

新篁解籜右梢

新篁、籜を解く左梢（若い竹が皮をおとして左より出でたる梢）

新篁解籜左梢

安根式（根を安んずる式。根もとを畫く法式）
下截、根を見はす（竹の下の部分、根もとをあらはす）
根下の苔草と泉石（根もとの苔と草及び泉と石）

畫竹具字法之四體。竿勁直如篆。節波趯如隸。枝縱横如草。葉整齊如眞。竹雖畫則亦字矣。墨竹不始于與可東坡。至與可東坡。始各擅其長。有謂與可畫竹是左氏。東坡卻類莊子。筆之奥妙。又合乎古文。然則畫竹胸無成竹。固不可。若胸無文字。亦不可。今芥子園之編定竹譜。故于前立起手式。一如作字四體之有八法。此全圖已先創輯。屬予鑒正。加以删補。至其筆之類莊類左。識者自能區別。予不敢居胡氏之添傳。亦不欲蹈郭子之註莊也。

辛巳竹醉日繡水王蓍識

【譯】畫竹は字法の四體を具ふ。竿の勁直なるは篆の如く、節の波趯なるは隸の如く、枝の縱横なるは草の如く、葉の整齊なるは眞の如し。竹は畫なりと雖も、則ち亦字なり。墨竹は與可・東坡に始まらざれども、與可・東坡に至りて、始めて各〻其長を擅にす。『與可の畫竹は是れ左氏、東坡は卻つて莊子に類す』と謂ふもの有り。筆の奥妙なること、又、古文に合す。然らば則ち竹を畫くは、胸に成竹無ければ固より不可なり。若し胸に文字無きも亦不可なり。今、芥子園の、竹譜を編定するや、故に前に于て起手式を立つること、一に字の四體を作るに八法有るが如し。此全圖は已に先づ創輯せられ、予に屬して鑒正し、加ふるに删補を以てせしむ。

其筆の莊に類し左に類するに至りては、識者自ら能く區別せん。予は敢て胡氏が傳を添ふるに居らず、亦、郭子が莊を註するを蹈むを欲せざるなり。辛巳の竹醉日、繡水の王著識す。

【註】 畫竹具字法之四體、竹を畫くには文字を書く法の四つの體を具備して居る。○波趯、書法にて、左に撇するを波と曰ひ、筆鋒上に出づる者を趯と曰ふ。書法の文字を借りて節を描くに喩ふるなり。○與可畫竹是左氏、東坡却類莊子、文與可の畫ける竹は左傳の文章に似、蘇東坡の畫ける竹は莊子の文章に似たりと云ふなり。左傳・莊子並に文章の巧妙なるを以て稱せらる。左傳は卽ち春秋左氏傳にして、孔子の編述されたる春秋を左丘明が傳せし者なり。述ぶる所の事跡、皆、國史に徵す。故に春秋を說く者、必ず是れを以て根據と爲す。莊子は周の莊周撰す。都て十餘萬言。漢の藝文志より以來、皆、道家に列し、老子と並べ稱して道家の祖と爲す。唐の天寶元年、詔して號して南華眞經と爲す。世說新語に謂ふ、莊子を注する者數十家あり。向秀、舊注の外に於て、別に解義を爲る。惟だ秋水と至樂との二篇、未だ竟へずして卒す。郭象、秀の義の世に傳はらざるを以て、遂に竊みて己が註と爲し、自ら秋水と至樂との二篇を註し、又、馬蹄一篇を易ふと。則ち今の傳ふる所の郭象の註は、實は向秀の作る所なり。○成竹、蘇東坡の畫竹記に曰く、竹を畫くには必ず先づ成竹を胸中に得と。晁補之の詩に曰く、與可畫竹時、胸中有二成竹一と。○于前、この于の字は、原本、予に作れるは誤なり。今、訂正す。○八法、永字八法なり。前に註せり。○胡子之添傳、胡子は胡安國なり。宋の崇安の人。字は唐侯。初め進士を以て提舉湖南學事たり。親沒し、屢〻薦めらるれども起たず。嗣いで朝旨敦く趣す。始めて詔に應ず。中書舍人に除せられ、論列する所多し。進み難く退き易く、官に在ること四十年、實歷は六載に及ばず。學を强め行を力め、時艱を救濟するに志す。而して風度凝遠にして、天下を視るに、一物の其心に嬰るる無し。卒して文定と謚す。春秋には、舊、公羊・穀梁・左氏の三傳有りしが、經と傳と合し、其文互に異なり。傳ふる所の事實、亦、微しく同じからざる有り。宋に至りて、春秋を言ふに、遂に三傳を廢する者有り。胡安國、春秋に精しく、春秋傳三十卷を撰す。尤も元明の時に崇尙せらる。之を胡傳と曰ふ。○辛巳、康熙四十年、皇紀二三六一年、西紀一七〇一年。○竹醉日、四民月令に、五月十三日を、之を竹醉と謂ふ。又、竹迷と謂ふ。是の日に竹を栽うれば多く盛なりと。

虛心、石を友とす（李息齋の筆法を摹す）

虛心は竹の德である。竹幹の內部は空虛なるを以て人の虛心の德に比したのである。虛心の語は、何人が始めて竹に用ひたかは未だ詳かにしないが、唐の張僊（ひつ）の竹を詠ずる詩に、終日虛心待鳳來とあるのは、大分古いのであらう。相似たる意味のものには、晉の江逌（ゆう）の竹賦に、含虛中以象道の句があり、唐の白居易の養竹記に、竹心空空として以て道を體す、といふ句がある。

雙竿、玉に比す（曾て自然老人に此圖有るを見、意を以て之を臨す）

雙竿は二本の竹竿である。然るにここに三竿あるは如何なる故なるか、恐らくは題字の誤ならんか。並び立つて居る二竿を主として言ふならんも、疑ふべし。

瀟洒として風に臨む（樂善老人の筆意に擬す）

これは風竹の圖である。瀟洒は清高にして俗を絶つ貌

新篁、籜を解く（程堂の畫に倣ふ）
新篁は若竹である。籜は筍の皮である。

新梢、墻を出づ（陳横屋の筆法に倣ふ）

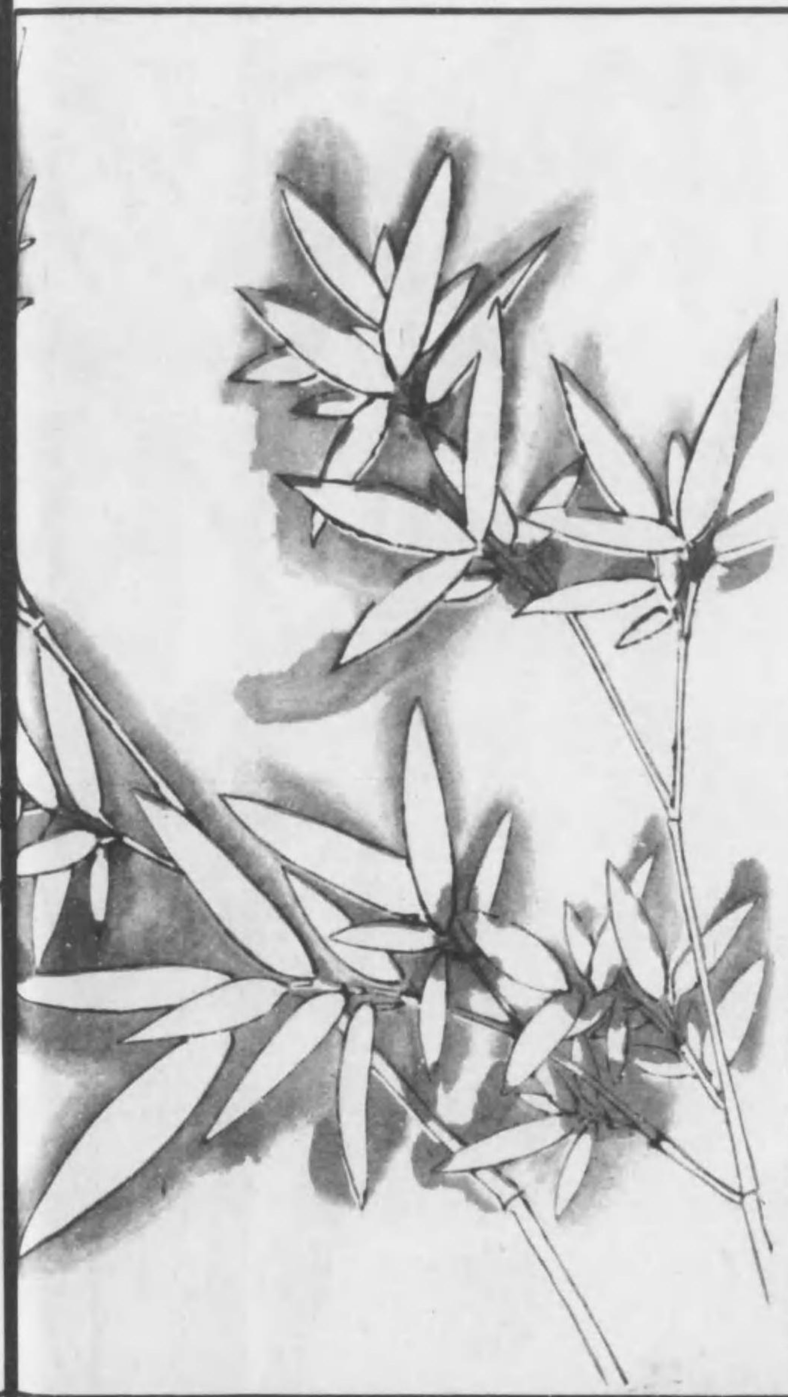
新しき枝が伸びて墻の外に出づ。明の陳芹、字は子野、横屋と號す。上元の人。弱冠にして鄉に舉げられ、奉新・寧鄉の知縣に歷任す。竹は管道昇を學び、修篁文石、問ふるに蘭純を以てし、位置正雅なり。花草山水、皆、逸品に入る。詩に工なり。其時、顧璘、詞壇に主たり、士大夫、風を希ひ應に付き、其道大に彰はる。而して芹も亦之に從つて游ぶ。

濃葉、煙を垂る（東坡居士を學ぶ）

竹葉の繁茂したのである。煙を垂るは、葉の繁茂したるさまを形容したのである。

雲根玉立（盛雲浦の竹石蒼潤の法に倣ふ）

雲根とは石である。唐宋の詩人、多く石を雲根と謂ふ。雲は石に觸れて生ずるからである。玉立は玉のごとく立つとの意であり、竹竿の立てるを形容したのである。ここに石は書いてないのに雲根と曰ってあるは、原圖即ち盛雲浦の竹石蒼潤の圖に石が畫いてあったので、其題字を用ひた爲である。竹石蒼潤とは、竹蒼く石潤ふのである。明の盛時泰、字は仲交、雲浦と號す。水墨山水を善くし、竹石は雲林に效ふ。天才敏捷にして、古文詩を爲るに、筆を下せば輒ち數千言。聲名大に振ふ。顧璘、詞壇に主たり、時泰も亦之と游ぶ。小楷は倪を學び、行書は蘇米を學び、篆字は更に優なり。元賸記一冊有り、古今の名帖を品第す。城山堂集を著はす。



白竹、霧に隱る（張廷璵に倣ふ）

竹は節幹なり。竹の細小なる者である。白色の細竹を霧の籠めたのである。明の張緒は、字は廷璵、常熟の人。永樂の時、才名を以て薦められて會昌侯府教授となる。嚴竹は夏昶に亞ぎ、風韻に雅行す。詞筆通贍にして、楷法遒勁なり。

風を迎へて勢を取る（夏仲昭の風竹に倣ふ）
これは風に吹かれた竹である。

迎風取勢

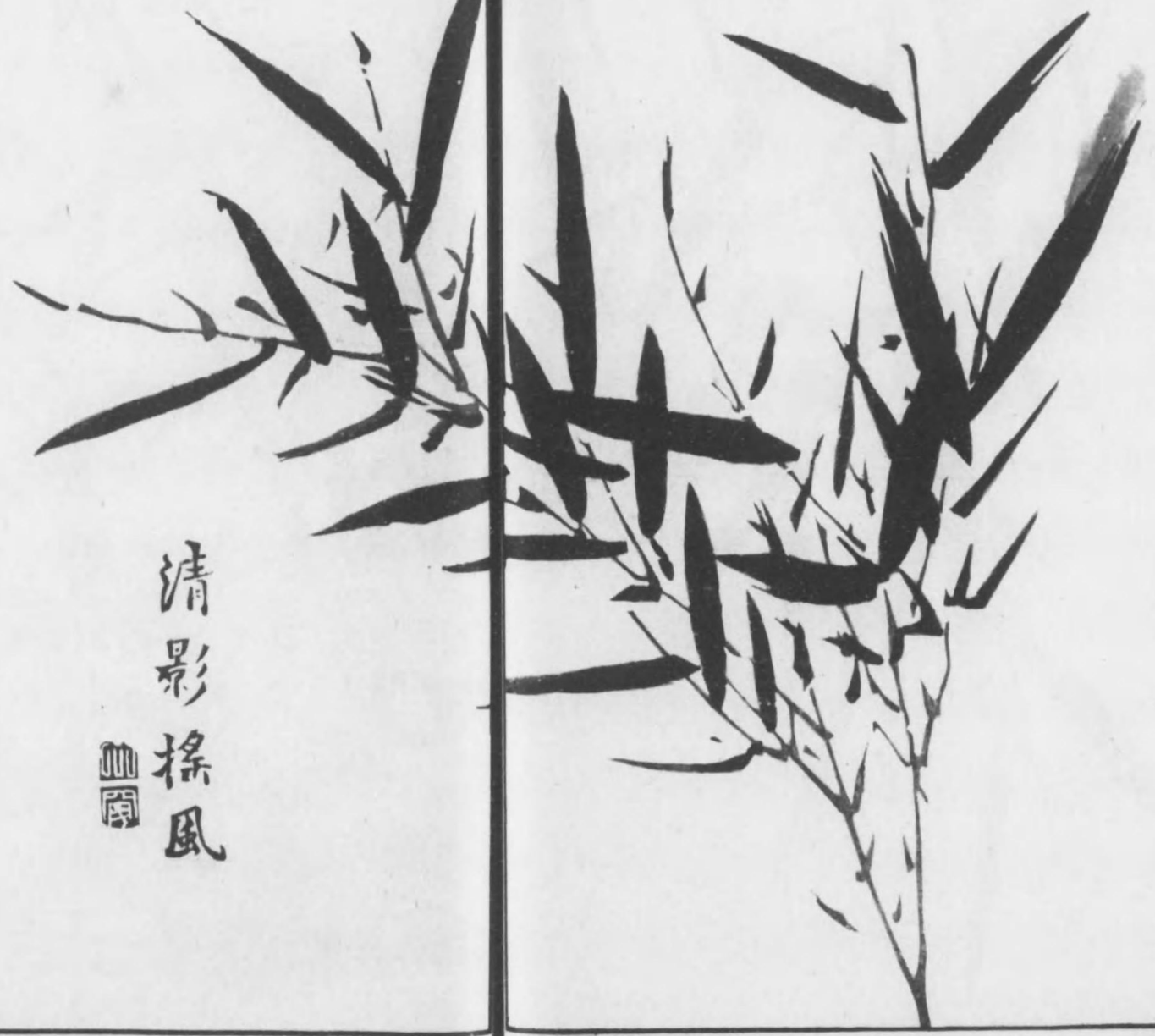
輕筠滴露（文湖州の筆意を摹す）

これは露に濡ほへる竹である。筠は竹のこと。

清節、秋を凌ぐ（史端本の雲行き水湧くの趣を學ぶ）

これは秋の竹を畫いたのである。清節とは竹の清潔なる節操の意。明の史忠、字は廷直、痴翁と號す。本姓は徐、名は端本、又、痴仙と號す。亦、痴痴道人と號す。金陵の人。年十七にして、方めて能く言ふ。外呆にして内慧、人、痴を以て呼ぶ。性卓犖不羈なり。畫は方方壺に似、雲山人物樹石に長じ、家數に拘はらず、行雲流水の趣を得たり。

清影、風に搖ぐ（王孟端を臨す）
これは風竹を畫いたのである。



直節、霄を干す（黄華老人に倣ふ）

霄は天空である。これは竹竿の屹然として挺立したる意である。

柔枝、雨を帶ぶ（歸文休の畫法を學ぶ　醒園柯）

これは雨に濕ほされたる竹である。清の歸昌世、字は文休、假菴と號す。崑山の籍、移りて常熟に居る。山水は倪黃に法り、餘ねて蘭花を作り、墨竹は洪澳の思有り。十歲にして詩を能くす。早く舉業を棄て、發憤して古文を攻る。書は晉唐に法り、草書を善くし、餘ねて印篆に工に、李流芳・王思堅と與に三才子と稱せらる。萬曆甲戌生れ、順治乙酉卒す。年七十二。自訂詩十卷・雜文百篇あり。醒園柯は何人の別號なるか未だ詳かならず。

湘江の遺怨（鄭協律の畫法に擬す）

これは湘妃竹を畫いたのである。舜の二妃娥皇・女英（卽ち湘君・湘夫人）は舜の南巡せるを慕うて蒼梧山に至り、其の崩ぜしを知りて大に哀しみ、遂に湘江に溺れて死し、湘江の神と爲れり。而して二妃の淚、竹を染め、今に至るまで湘妃竹に斑點あるは、淚痕の然らしむる所なりと傳ふ。この故事によりて、此題をつけたのである。

湘江遺怨

露、寒葉に凝る（屈處誠の畫を臨す）

これは晩秋の露に濕ほされたる竹を畫いたのである。明の屈約、字は處誠、崑山の人。能く先世の遺書を讀み、隱居して仕へず。山水は深遠穠麗の致多く、王鋸の筆意を得、夏昶を師とす。潑墨して風雨竹を爲るに、頗る之に類せり。松を寫すこと、亦、妙に臻れり。

飛白、神を傳ふ（介軒老人を學ぶ）

飛白は鈎勒なり。神を傳ふとは、竹の精神を傳ふるをいふ。元の陶復初、字は明本、介軒老人と號す。天台の人。台州の儒學教授と爲り、從事郎樂清縣尹を贈らる。墨竹は李衍邱父子を師とし、及び著色の竹茎だ佳なり。亦、山水を能くす。小篆は徐張を師とし、古隸は鍾梁を師とす。

飛白傳神

龍孫、頴を脱す（文與可の新篁の圖を臨す）

これは若竹を畫いたのである。龍孫は筍のこと。頴を脱すとは、筍の皮を脱して枝葉の出でたるをいふ。

雪、銀梢を壓す（解處中に做ふ）
これは雪の積もりたる竹を畫いたのである。銀梢は枝に雪の積もつたのである。

鳳枝、月に吟ず（僧樗軒の筆を學ぶ）
これは月夜の竹を畫いたのである。鳳枝は竹の枝をいふ。

天鵠として霞を超ゆ（雪松老人、宋仲温の朱竹を臨す）これは高く立ちたる朱竹である。天鵠は飛び騰る鵠。雪松老人は未だ詳ならず。

交幹、雲を拂ふ（王澍遊を學ぶ）
これは交叉したる竹幹を畫いたのである。

修筠、節を抱く（趙元靖、蘇長公の放筆を學ぶ）

修筠は長き竹である。節を抱くとは、竹に節あるを人に節操あるに喩へたのである。元の趙元靖は、道士、墨竹を以て浙國に名あり。蘇長公は東坡なり。放筆は漫筆といふが如し。筆に任せて書きたるをいふ。

高竿、條を垂る（吳元瑜に倣ふ）

これは高き竹幹より出でゝ下に垂れたる枝を畫いたのである。

301
40

昭和十年四月二十日印刷　豫約會費
昭和十年四月二十九日發行　壹圓參拾錢

全　芥子園畫傳
第七冊　竹譜

編者　小杉放庵
編者　公田連太郎
東京市牛込區喜久井町三四
發行人　北原義雄
東京市豐島區高田南町一丁目一九五
印刷所　美術印刷株式會社
東京市牛込區四五軒町三四
製本所　福山印刷製本所
東京市牛込區四五軒町三四
發賣所　福山書店
電話牛込四三六〇
東京市牛込區喜久井町三四
發行所　アトリエ社
電話牛込六四二一番
振替東京六六〇〇二番

第七冊終

301
40

終